

## イタリアのファシズム

イタリアは戦勝国だがフィウメ港とダルマチア地方の領有が認められず、ヴェルサイユ体制に強い不満を持つ。失業者は増大、経済は混乱状態だった！社会主義勢力が支持を拡大しつつあった。

- 1) 1920年、変革を求める労働者や農民の運動は高揚し、社会党左派（後の共産党）の指導で北部の都市でストライキや工場占拠が広がり、南部では貧農小作民による農地占拠が広がった。北イタリアのストライキは、政府が労使双方の妥協を引き出し平和裏に収拾された。以後、左翼運動は低迷期に入り、支配層の反撃が始まった。

- 2) 青年期に熱心な社会主義者としてイタリア社会党左派で活躍した【1: 】は、第一次世界大戦が勃発すると参戦論に転じ、民族主義・反革命主義を鼓吹し、社会党を除名された。前掲1)の前年の1919年には、ミラノで「戦士のファッシ」を結成し、労働・農民運動を襲撃する直接行動を始めた。初めはあまり注目されなかったが、革命運動の激化に危機感を募らせた資本家・地主階級が彼らに莫大な資金を提供し、軍部・警察も彼らの運動を容認するようになった。これに力を得た彼らは1921年初頭から「ファシスト懲罰遠征」と呼ばれる、労働組合・社会主義政党とその活動家に対する暴行・殺人・放火などを公然と行った。同年11月、「戦士のファッシ」は【2: 】 Partito Nazionale Fascistaと改称され、全国に支部と軍事組織が作られた。ファシスタ党と記す場合もある。

領土問題ではナショナリズムで扇動し、経済危機は以下のように社会主義と議会制民主主義の責任であるとした。

ファシスト党の考え方：①危機の原因は左翼勢力の活動や議会制民主主義そのものにある。だから②左翼勢力は暴力を使っても排除し、③強権的な指導者が国民生活を統制して国民統合をはかる。

このような思想を、ファシスト党の名を借りてファシズムという。

ファシスト党は、ナチより11年も早く1922年に政権を獲得したファシズムの「大先輩」である。民主主義そのものを敵視し優秀な指導者1人が全責任を負う、というナチの思想も全く同じである。

《蛇足》著者の世代は、冷戦期にアメリカがソ連など人権軽視の社会主義国家ををナチと同列の全体主義国家と非難したことを記憶している。「全体主義」は「個人主義」の対義語で、これは本来誤用である。講学上の混乱を避けるためにも、本書では「全体主義」をファシズムの別名とは見なさない。

- 3) 1922年10月27日、ムッソリーニは【3: 】を実行した。目的はファシスト党党员の入閣と、ムッソリーニ自身を首相とした内閣を実現すること。机上プランでは、全国の都市で「黒シャツ隊」と呼ばれていた武装部隊が、市庁舎・警察署・鉄道・郵便局などを占拠し、同時に反ファシズム派の事務所・新聞社などを襲撃した上で、あらかじめ決めておいた3ヶ所の集合地に集まって、そこから「ローマ進軍」を行うというものであった。しかし実際にはこれらの計画の多くは、軍による様々な妨害や党员間の連絡の不徹底などで滞り、「ローマ進軍」自体は国王ヴィットーリオ=エマヌエーレ3世からムッソリーニに組閣の命が下るまでに実行されなかった。行動は1922年10月27日夜に起こされ、政府は翌28日朝、この行動を阻止するため戒厳令の布告を決定、ファクタ首相は国王ヴィットーリオ=エマヌエーレ3世の署名を求めた。しかし、革命の進展に王政の危機を感じて保守派に傾いていた国王は、署名を拒否した。3ヶ所の集結地に集まったのは予想外に少なく、1万4千人ほどであった。その上、武装していない者も多く、雨と食糧不足もあり、軍に列車を止められ出発できなかった。進軍の失敗を覚悟したムッソリーニは、スイスへの亡命の準備をしていたという。ところが、一転して国王は29日にムッソリーニに組閣を命じた。これを受けて鉄道の封鎖も解かれ、イタリア各地から残りの黒シャツ隊が「ローマ進軍」を始め、ローマに入り始めたのは翌30日のことであった。このように、ムッソリーニのファシスト政権の樹立には、国王が大きな役割を果たしていた。国王も支配層も社会主義勢力に対抗しうる強力な政府の成立を望んでいた。第二次世界大戦後のイタリアで、国民投票の結果、王政が廃止されたのは、国王が一貫してファシズム政権を支持していたことが批判されたためであった

実は1923年のミュンヘン一揆は、ヒトラーがこれを模倣したものであったが、失敗に終わった。

- 4) こうして1922年、わずか35議席（総議席数535）のファシスト党は政権についたが、それは当然にも国民党・民主党・民主自由党といった保守・中道政党との連立政権であった。ムッソリーニが首相の他に外務大臣と内務大臣を兼ねて権力を固めた。翌年、選挙法改正案を半ば暴力的に通過させた。それは、全得票数の4分の1を獲得した政党が議席の4分の3を得るというものであった。これに基づいた総選挙が1924年に行われ、その結果、ムッソリーニはファシスト党単独内閣を成立させ、完全な独裁権力を掌握した。さらに政敵を追放する活動を行い、1926年までに一党独裁体制を確立した。1928年、ファシズム大評議会（本来ファシスト党の一機関にすぎない）が国家最高決定機関となり、一党独裁体制は完成した。1870年（教皇領併合※1）以来国交断絶状態だったローマ教皇庁と、1929年、【4: 】※2で和解した。

- 4) 余暇を楽しむ組織を作るなど、大衆の同意を取りつける努力をした。

- 5) 膨張政策を実行した。支配層の取り分を削らず貧富差を温存したまま大衆の支持を確保する常套手段である。

1924年、1919年にユーゴスラヴィアから奪った【5: 】を併合。

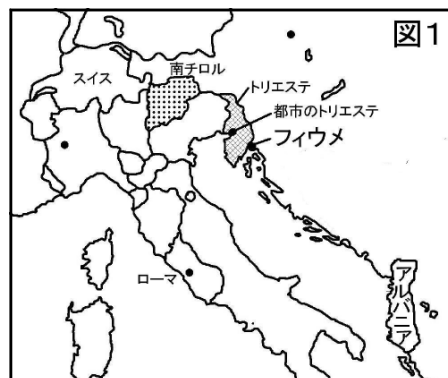
図1で位置を確認せよ。

1927年、【6: 】をティラナ条約(1926・/27)で保護国にする。1939年には併合。図1で位置を確認せよ。

※1 イタリア王国（1861年成立）は1870年、プロイセン=フランス戦争に乗じて教皇領を占領した。No.134参照。

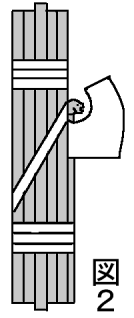
※2 イタリア王国はヴァチカン市国の独立を認める。カトリックを国教と定め、教会への賠償を規定。ローマ教皇はムッソリーニ政権を承認する。

- 6) ファスケス fasces とは、「束」を意味するラテン語の名詞ファスキス fascis の複数形で、通常は図2のように斧の周りに木の束を結びつけたものを指す。ムッソリーニはファスケスを党の象徴として、党旗のデザインやパレードの装飾として用いた。



しかしハーケンクロイツやスヴァスティカと異なり、象徴としてのファスケス使用の禁止・表現の自粛などの強い動きは起こっていない。従来から伝統的にファスケスを用いていた団体などは継続して意匠として用いている。

《蛇足》アニメ『紅の豚』(1992年、スタジオジブリ)では、第一次世界大戦中はイタリア空軍のエースパイロットだったポルコは、空軍への復帰の誘いを断り今は賞金稼ぎ。大修理を終えた深紅の飛行艇でアドリア海に帰還する途中、今も空軍に属するかつての戦友が誘導してくれるシーンで、戦友の機体側面に右図のファスケス(左右が逆だが)が描かれているのが分かる。時代設定は1929年、イタリアは既にファシスト政権、ポルコが豚の姿に身をやつしている理由は作中では明らかにされないが、戦争で友を失った悲しみや国家への幻滅が示唆されている。



## 東欧・北欧諸国

東ヨーロッパの諸国は多くは独立を許されたが、チェコスロヴァキアを除き、**封建的な土地所有が残る農業国で、議会制民主主義が根付かなかった**。協商国の介入もあり不安定で、1920年代の世界的農業不況による打撃は大きく、1920年代末以降は独裁支配の傾向が見られた。各国について簡単にまとめる。図3を参照

- 1) ポーランド ポーランド=ソヴィエト戦争 1919-22を遂行した【7: 】が、1926年「五月革命」(軍事クーデター)で独裁体制を固めた。フランスと連携してヴェルサイユ体制を守る立場を取るが、リトアニア人、ドイツ人、ユダヤ人等少数民族問題を抱える。No.171の※5 参照
- 2) ハンガリー ロシア革命にならった革命(1919)は成功したが、まもなく軍人の【8: 】やルーマニア軍の侵入で打倒された。領土を失った反動から次第に極右勢力が台頭。ホルティは、1920年以降王政を復古させ、国王が空位であるにもかかわらず摂政として独裁体制を行うという一種の権威主義体制 ※3が続いた。No.172参照
- 3) オーストリア 議会制憲法が廃止され、親ナチ政権が成立。
- 4) フィンランド ソ連との国境問題をかかえる。
- 5) エストニア・ラトヴィア・リトアニア 少数民族問題をかかえる。
- 6) チェコスロバキア **東欧で唯一の工業国。議会制民主主義を維持**していた。フランスと連携してヴェルサイユ体制を守る立場を取るが、ズデーテン地方のドイツ系住民が自治を要求するなど少数民族問題を抱える。
- 7) ブルガリア 1930年代に国王が独裁を宣言した。
- 8) ルーマニア フランスと連携してヴェルサイユ体制を守る立場を取るが、1930年代に国王が独裁を宣言した。

## ユーゴスラヴィア

- 1) 1918年、第一次世界大戦中、オーストリア=ハンガリー帝国内の矛盾が表面化、諸民族の独立運動が始まった。協商国がチェコスロヴァキア国民会議を臨時政府として承認すると、他の帝国内の諸民族も次々と独立を宣言した。皇帝カール1世は退位して亡命。11月には帝国は解体した。
- 2) セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人が1918年12月にオーストリアから独立を宣言。統一国家【9: 】を建国した。中心となったセルビアの集権主義とクロアチアの連邦主義が対立して内紛が絶えず。
- 3) 1929年、前掲2)の国家は【10: 】と改称。第二次世界大戦後は社会主義国となったが、1991年からの紛争で解体した。図3で位置を確認せよ。  
なお、図3の太線は1918年に解体した旧オーストリア=ハンガリー帝国の境界を示している。同帝国は、1867年にアウグスライヒにより成立した。



## レーニン亡き後のソ連

1924年、病床から後継者を案じつつレーニン死去。後継者争い起きる。

- 1) 【11: 】が権力を握る。彼は一国社会主義論 ※4の立場から、世界革命を主張する【12: 】ら「左派」を追放した。新経済政策(ネップ)の継続を主張する「右派」も排除した。
- 2) スターリンは1928年~32年【13: 】を実施した。**重工業優先政策**で、**農業は機械化・集団化** ※5が強行された。反対する農民は逮捕・投獄。生産物の強制供出を実行。農業は荒廃し、1932~33年には農民に餓死者多数を出す。1930年代はじめから1953年まで続いたスターリンの独裁のことをスターリン体制と呼ぶ。

《まとめ》 戦時共産主義 → 新経済政策 → **第一次五カ年計画** → 第二次五カ年計画

1918-21	1921-28	1928-32	1933-37
レーニン	レーニン	スターリン	スターリン

- ※3 教会・王家・地主層など伝統的権威に対する国民の敬意や服従心を利用して貫徹される強権的支配体制。《民主主義的体制と全体主義体制の中間に位置する体制》と説明されることもある。スペインのフランコ体制や東欧のいくつかの国の強権体制、第二次世界大戦後の発展途上国の開発独裁などがある。
- ※4 スターリンはソ連は広大な国土を有するので一国だけでも社会主義社会を建設できると考えた。トロツキーは1929年に追放され、1940年メキシコで暗殺された。一国社会主義も全世界に社会主義を広めることを否定したわけではなく、共産主義インターナショナル(コミンテルン)を通じて各国に社会主義政당을育成した。一国社会主義は「世界中でどんどん革命が起きないとソ連が持たない」とは考えないだけ。しかし、コミンテルンは「世界革命」の組織からソ連一国を擁護する組織に墮落した。
- ※5 コルホーズは、スターリンの第一次五ヶ年計画の中核。土地、農具、家畜を共有する集団農場。ネップにより復活した富農を根絶し、農村における社会主義革命を完遂することが目的。この五ヶ年計画中に一気にソビエト全土でコルホーズが組織された。富農は階級の敵と規定され、処刑か強制収容所送りとなった。犠牲者数は数百万人にのぼるとも言われる。コルホーズは、開拓地などに設立されたソフホーズ(国营農場)とともにソビエト農業の基本構造となった。生産の非効率さが歴代の政権の課題となりつつソ連崩壊まで存続した。